**私がそこにいる 2017/9/10**

**マタイ 18:15-20 スティンストラ牧師**

世界中の信仰者たち、とくに説教者たちは、今朝の福音書箇所の最後の一節を、いつも慰めの言葉としてきた。この言葉は、教会内で問題が生じてしまい、避けようがなくて、痛みを伴い、そして、人々の心の対立をどう扱ったらよいか、そのような事態に対するアドバイスがたくさん含まれている福音書箇所に織り込まれた言葉である。　イエスが、二人または三人がイエスの名において集まるところに、イエスがそこにいてくださるという約束が語られることは、とても大きな慰めがあり、どんなほかの場所よりも、そこにいてくださるということに特別な意味がある。それゆえ、私が説教をする場所が、どこであろうが、どんなに大勢の人が集まっているところであろうが、あるいは残念なことにほとんどの場合はそのような大勢とはいえない場所だが、どんな場所において説教することになろうが、私は苦にならない。また、私たちの群れが礼拝堂の中で礼拝を守ることになろうが、海辺の砂浜の上で礼拝を守ろうが、やはり苦にならない。なぜならそこに私たちの主がいてくださるという大きな意味を見出すからだ。

テキサス州、ルイジアナ州、そしていまやフロリダ州のハリケーンの猛威、ハービーとイルマの猛烈な雨によって破壊されてしまった教会にとっては、たとえ彼等が水浸しになった礼拝堂の中でその被害の実態を詳しくしらべるために歩んで行くときでも神がともにいてくださるという約束は、新鮮でまたより重要な意味を持ってくる。すさまじい破壊力によって屋外での礼拝を余儀なくされ、すべてが無くなってしまった状態で嘆き悲しむときに、そのすぐそばでいっしょに嘆いてくださる主なる神を頼ることができるのだ。これからの復興に向けて歩もうとする際、これまでには経験したことがないほどに、彼等はイエスに頼ることになる。彼等の礼拝堂にしても、彼等の家々にしても、同じようにそこに入ることが危険にさらされる時に、彼等はいっしょにいてくださる主が必要なのだ。荒廃を体験する人々は、次のようなイエスの言葉を切望する。「私はあなたが粉々になってしまった夢を振り返る時にもすぐ近くにいるし、これから長い時間を要する復興に向けて、役人や保険会社の査定をする人々がきわめて重要な決定をするその只中にも存在している。」　被災者たちは、仲たがいをした教会の兄弟姉妹たちとの関係を再びとりもどすのにどうしたら良いかということに関する細かい規定を書いた聖書の箇所に興味はなくどうでも良いのだ。そのような規定の話はもっとほかの時にすれば良い、なぜなら彼等は疲れすぎてしまってだれとも言い争いなどはできないし、このような災難に際して援助をしてくれる可能性のある人を一人として遠ざけてしまうような危険をおかしたくはないのだ。

このような惨事は、神の民たちにイエスの言葉をただ当たり前に受け取るのではなく、その言葉について真剣に考えさせる。ただ神がどういう存在かについて思いをめぐらせるのではなく、神がどこにいるのかという問いに呼び起こされる。そしてひとつの教会として何をするにしても、何を話すにしても、献金をどこに送るか、あるいはプリスクールに冷房を設置すべきか、あるいは次の時代の復活ルーテルを導くのにだれがもっとも良いのか、等々の決断をする際にも、常に神がともにそこにいてくださるということを意識するかしないかが、どのような違いをもたらすかと思いをめぐらせるようになる。そして、次のことが起こったとき、なにかが変わったということを突如として気がつく。みなさんは、あたかもイエスがそこに存在していないかのごとくに教会のビジネスを進めてゆくことはできない、その教会の部屋にはあなたとともにイエスがおられ、あなたがイエスについて語る言葉を注意深く聞いておられ、カウンセルミーティングで話される正式な話し合いをもちろん聞いておられるし、礼拝後に行われる駐車場での正式ではない話し合いの内容も聞いている。危機的な状況に直面している際にいっしょにいてくださると約束してくださる神と、その同じ神が私たちのごく普通の会話の中にもいてくださるーたとえ神がいてくださる重要性が低いと感じている時でも。驚くことに、イエスは毎週のスタッフミーティングにもいつもいらしてくださるし、女性のバイブルスタディが開かれている家々にもいつもいてくださる。最後の讃美歌を歌ったあとに、われわれがはじめてこられたゲストたちにどう心地よく迎えているかをも見てくださっているし、私たちが将来のビジョンについて話し合っているときにも気遣って聴いてくださっている。イエスは私たちの間にいてくださって、わたしたちがイエスについて何を話したかすべてを聴いてくださっていて、また何を話さなかったかもわかっておられる。

それゆえ、この聖句はわたしたちの傷ついた魂をなぐさめてくれる言葉であると同時に、すこしばかり心地悪くする言葉でもある。なにかの問題が起こっていて神様がいてくださることを切望するときにまさにそこにいてくださる神だが、わたしたちの日ごろのビジネスが順調な場合は、神の存在は怖いものにもなりうる。イエスが顕れてくださることは、かならずしも良き知らせとはいいがたい、特に神の王国の仕事を私たちの手を使うことを怠ってしまっているような時にイエスが顕れるような時だとしたら。いつも私たちのそばにいてくださろうとする神は、必ずしも私が居て欲しいときだけいてくださる神ではない、なぜなら神はだれによっても押さえつけられたり、制御されたりする神ではないのだから。

イエスがマタイ18章20節で約束したことをそのまますばらしいこととして神の民が呼び求める必要がある時もあれば、イエスが私たちの間におられると言われた事は、神の目的があって私たちに注意を喚起して、私たちがしていること以上のことを成すように仕向けている場合もある。　私たちがイエスの名のもとに集まっているところに、イエス自身がぴったりと身をよせているとき、現代の非宗教的な価値観の洪水にあっている私たちの心を改め始める。強力な文化のハリケーンによって、換算しようのない損失を被ってしまった心や考え方を新しいものにしてくださる。しかし、そればかりではない。イエスはわたしたちといっしょにいて、ある種の人間になるよう形成してくださり、わたしたちを引き戻して、わたしたちが仕えるようにと招かれた伝道の業に従事するための準備をするように仕向けてくださる。そしてその伝道とは、この壊れてしまった世の中を修復することだ。

それゆえ私たちは今朝ここに座って、南西部で起こった惨事からは遠く離れた状態でも、イエスが二人・三人と集まったところにいつもいっしょにいてくださるというイエスの約束を守ってくださっていることをしっかり覚えていよう。なぜなら、イエスが彼の名において何が成されるかを心配してくださっているから。今日、イエスは悲惨なめにあってしまった人々といっしょにいてくださっている。そして、共感して対応しようとしている我々ともいっしょにいてくださる、というのは彼が言ったことはそのまま彼が実行することだから。　イエスは困難に直面している人々を慰められるように十分に被災者たちのすぐ近くにいる。それと同時に、この世であまりにも楽をしすぎている者にも、再考を促せるように十分近くにいる。そのようなバランスの中で、真の私たちがどう生きるべきか見い出すことができる。　アーメン。